

書かでもの記

永井荷風

青空文庫

身をせめて深く懺悔ざんげするといふにもあらず、唯臆おくめん面もなく身の耻とすべきことどもみだりに書きしるして、或時は閱歴えつれきを語ると号し、或時は思出をつづるなんぞと称となへて文を売り酒沽かふ道に馴れしより、われ既にわが身の上の事としいへば、古き日記のきればしと共に、尺八しゃくはち吹きける十六、七のむかしより、近くは三味線けいこに築地つきじへ通ひこともでも、何のかのと齒の浮くやうな小理窟つけて物になしたるほどなれば、今となりてはほとほと書くべきことも尽き果てたり。然るをなほも古き机の抽斗ひきだしの底、雨漏る押おしい入れの片隅に、もしや歡場かんじょう二十年の夢の跡、あちらこちらと遊び歩きし茶屋小屋の勘定書、さてはいづれお目もじの上とかく売女ばいじょが無心の手紙もあらばと、反古ほごさへ見れば鵜うの目鷹の目。かくては紙屑かみくず拾ひろいもおそれをなすべし。

つらつらここにわが売文の由来を顧み尋たずぬるにわれ始めて小説の単行本といふもの出せしはわが友巴山人はさんじん赤木君の経営せし美育社なり。数ふれば早十七年のむかしとなりぬ。巴山人は早稻田出身の文士にて漣山人せせんなん門下の秀才なりしが明治三十四年同門の黒田湖山こざんと相あ

いはか 凶り 麴町 三番町 二七不動のほとりに居をかまへ文学書類の出版を企てき。その頃文学小説の出版としいへば殆ど春陽堂一手の専門にて作家は紅葉露伴の門下たるにあらずんば殆どその述作を公にするの道なかりしかば、義侠の巴山人奮然意を決してまづわれら木曜会の氣勢を揚げしめんがために贅を投じ美育社なるものを興し月刊雑誌『饒舌』を発行したり。『饒舌』は寸鉄かへつて人を殺すに足るとて三十二頁の小冊子とし、黒田湖山主筆となりて毎号巻頭に時事評論を執筆し生田葵山とわれとは小説を掲げ西村渚山は泰西名著の翻訳を金子紫草は海外文芸消息を井上唾々は俳句と隨筆とを出しぬ。これと共に美育社は青年小説叢書と題してまづ生田葵山の小説『自由結婚』次に余の拙著『野心』西村渚山の『小間使』黒田湖山の『大学攻撃』等を出版し、また星野麦人をして『古今俳句大観』四巻を編纂せしめき。翌年美育社ますます業務を拡張し神楽坂上寺町通に書籍雑誌の売捌店をも出せしが突然社主赤木君故ありてその郷里に帰らざるべからざるに及び、惜しい哉事皆中絶するに至りぬ。雑誌『饒舌』は湖山一人の手に残りて『ハイカラ』と改題せられしが気焰また既往の如なる能はず幾何ならずして廃刊しき。

これより先生田葵山書肆大学館と相知る。主人岩崎氏を説いて文学雑誌『活文壇』を

発行せしめ、井上唾々と共に編輯の事を掌りぬ。『活文壇』は木曜会同人の作を
 発表するの傍汎く青年投書家の投書を歓迎して販売部数を多からしめんことを試みたり。
 然れども当時この種の投書雑誌には小島烏水子の『文庫』、田口掬汀氏の『新声』等そ
 の勢力甚盛なるあり。新刊の『活文壇』は再三上野三宜亭に誌友懇談会を開き投書家を
 招待し木曜会の文士交文芸の講演を試むる等甚勉むる処ありしが、書肆早くも月々の
 損失に驚き文学を疎じて赤本を迎へんとするに至つて『活文壇』は忽ち廃刊となりき。
 ここに本町一丁目の金港堂明治三十五年の頃突然文学婦人少年等の諸雑誌並に小説書
 類の出版を広告して世の耳目を驚かせしことあり。金港堂といへば人に知られし教科書々
 類の版元なり。この書肆の資金を以て文芸その他諸雑誌の発行に着手せんかこれまで独
 りてんか天下の春陽堂博文館ともどもに顔色なからんとわれ人共に第一号の発刊を待ちかね
 たり。やがて現はれたるものを見れば文学雑誌はその名を『文芸界』と称し佐々醒
 雪を主筆に平尾不孤草村北星齋藤弔花の諸子を編輯員とし巻首にはたしか広
 津柳浪泉鏡花らの新作を掲げたり。されどこれらの新作さして評壇の問題となら
 ず雑誌はまた徒に彪大なるのみにて一貫せる主張といふものなく甚締りなしとの非難あり
 き。されば従来の『文芸倶楽部』と『新小説』、依然として一は通俗的に一は専門的なる

本来の面目を把持して長く雑誌界に覇をとなへ得たり。

金港堂の『文芸界』は第一号の発刊と共に賞を懸けて長篇小説を募集しぬ。敢て選者の名を公にせざりしかど醒雪子以下同誌編輯の諸子なりしや明なり。余が『地獄の花』とよべるいかかはしき拙作はこの懸賞に応募したるもの。選に入ること能はざりしが編輯諸子の認むる所となり単行本として出版せらるるの光榮を得たるなり。原稿料この時七十五円なりき。さてこの折選に入りしもの一等に米光閔月の『千石岩』二等に齋藤溪舟の『殘菊』、田口掬汀の某作等ありしと記憶す。これらの作家皆功成り名遂げて早くも文壇を去りしに、思へばわれのみ唯一人今に浮身を衆毀の巷にやつす。哀むに堪へたりといふべし。

懸賞小説といへばその以前より毎週『万朝報』の募集せし短篇小説に余も二、三度味をしめたる事あり。選者は松居松葉子なりしともいひまた故人齋藤緑雨なりしといふものもありき。応募者には知名の大家折々小遣取りにいたづらするもの多かりし由。当時懸賞小説さまざまありしが中に『万朝報』の短篇最もすぐれたるを見ればかかる噂もまんざらの根なしごとにはあらざりしが如し。

金港堂より単行本出せし後はどうやらかうやらわれも新進作家の列に数へ入れらるるや

うになりぬ。たしか明治三十六年の春なりしと覚ゆ。新俳優伊井蓉峰小島文衛の一座市村座にて近松が『寿門松』を一番目に鷗外先生の詩劇『両浦島』を中幕に紅葉山人が『夏小袖』を大喜利に据ゑたる事あり。またこの一座この度の興行にはわれらの知友たりし畠山古瓶といへる早稻田出身の文士、伊井の弟子となり初めて舞台へ出づべしといふに、いささか氣勢を添へんものと或日風葉葵山活東の諸子と共に、おのれも市村座に赴きぬ。あたかも好しその日は与謝野鉄幹子を中心とせる明星派の人々『両浦島』を喝采せんとて土間棧敷に集れるあり。幕いよいよ明かんとする時畠山古瓶以前は髯むぢやの男なりしを綺麗に剃りて羽織袴の様子よく幕外に出でうやうやく伊井一座この度鷗外先生の新作狂言上場の許を得たる光榮を述べき。一幕二場演じをはりてやがて再び幕となりし時、わが傍にありける某子突然わが袖をひき隣れる棧敷に葉巻くゆらせし髭ある人を指してあれこそ森先生なれ、いで紹介すべしとて、わが驚きうろたへるをも構はずわれを引き行きぬ。われ森先生の聲咳に接せしはこの時を以て始めとす。先生はわれを顧み微笑して『地獄の花』はすでに読みたりと言はれき。余文壇に出でしよりかくの如き歓喜と光榮に打たれたることなし。いまだ電車なき世なりしかどその夜われは一人下谷よりお茶の水の流にそひて麴町までの道のりも遠しとは思はず楽しき未

来の夢さまがま心の中にゑがきつつ歩みて家に帰りぬ。

かくて『文芸界』をはじめ『新小説』『文芸倶楽部』などに原稿を持ち行きても三度に一度はしづしづながら買つてくれるやうになりぬ。されど原稿は三月半年と買はれたるまおおよけま公にせられざれば、売名にのみ心あせるものの長く堪たふべき所ならず。ここに詩人蒲かんば原有らありあけ明子新声社の主人と相知れる由よしを聞き子を介して新声社に赴おもむき『夢の女』と題せし一作三百枚ほど持てあましたるものをば原稿料は無用なればとて、ここに再び単行本一冊を出版したり。新声社は即すなわちいまの新潮社が前名にて当時は神田錦町区役所の横手にささやかなる店をかまへるなり。この一書さして版元の損にもならざりしと見えつづいて『女優ナナ』の出版にこたびは原稿料三拾円を得たり。これ明治三十六年初夏のことにてその年の秋虫の声やうやく繁くなり行く頃われはふと亜米利加アメリカに渡りぬ。わが売文のむかしがたりの中うちここに書漏かきそらせしはやまと新聞社に雇はれ雑報とつづきもの書きて月々拾弍円を得しことなり。そは明治三十四年なりしと覚ゆ松下某といふ人やまと新聞社と新聞社を買取り桜痴居士おうちこじを主筆に迎へしよりその高弟榎本破笠えのもとはりゆづ従つて入社しおのれもまた驥尾きびに附しけるなり。その時まで一年ほどわれは既に人にも語りし如く桜痴居士の門弟となり歌舞伎座にて拍子木打ちてゐたりしが、今の歌右衛門福助うたえもんより芝翫しかんに改名の折

から小紋こもんの羽織はおり貫はひたるを名残りとして楽屋を去り新聞記者とはなりぬ。過ぎしことなれば身の耻語りついでに語り出せば楽屋通はひよりまたまた二、三年前のことなり。われ講釈と落語に新しき演劇風の朗読を交へ人にん情じょう咄ばなしに一新機軸いを出いださんと野心を抱き、その頃朝寝坊むらくと名乗りし三遊派の落語家の弟子となりし事もあり。当今都下の席亭にむらくと看板かかぐるものはその頃の人とは同じからずといふ。

余のやまと新聞社いに入りし時三面雜報欄を受持さゐたるは採菊山人さいきくさんじんと岡本綺堂子おかもときどうなりき。採菊山人すなわちは即山々亭さんざんていありんと有あり人ひとにして仮名垣魯文かながきろぶんの歿後しごわれら後学の徒をして明治の世に江戸戯作者の風貌を窺うかがいし知しらしめしもの実にこの翁いちにん一人ありしのみ。さればわれ日々編輯局に机を連ねて親しくこの翁の教を受け得たる事今にして思へばまことに涙こぼるる次第なり。岡本綺堂子はその頃しきり頻しきりにユーゴー、ヂユマなどの伝奇小説を讀まれりたり。子は半蔵門外に居を構へおのれは一番町なる父の家いえに住みければ新聞社の帰途堀端を共に語りつつ歩みたる事度々なりき。子はその頃より甚謹嚴寡言はなはだのかげん人なりき。

日比谷ひびやには公園いまだ成らず銀座通ぎんざどおりには鉄道馬車の往復ゆききせし頃尾張町おわりちようの四角よつかど今ラひイオン珈琲店コーヒーてんある辺あたりには朝野新聞中央新聞毎日新聞ちようやなぞありけり。やまと新聞社は銀座一丁目の横町いま見る建物なりしかば、表通岩谷天狗いわやてんぐの煙草店に雇われたる妙齡おんなの女

店員てんいんいつもこの横町に集りて緋ひの蹴出けだしあらはにして頻しきりに自転車じゆうせんの稽古けいこするさま折々
目の保養となりしも既に過ぎし世のこととぞなりぬる。女の自転車と馬乗りとはその頃の
流行りゆうなりしにや 吉原よしわら品川しながわ楼ろうの抱かかえが和鞍わくらに乗りての遊山ゆうざんまた新橋しんばし芸者げいしやが自転車じゆうせんつら
ねて花見はなみに出かけし噂うわさなぞかしましき事ありけり。

さてわが新聞記者たりしもわづか半はんとし年ねんばかり社員淘汰たいたいのためとやらにて突然解雇げいこの知
らせを得たり。わが記者たりし時世ときよに起りし事件じけんにていまに記憶きおくするは星亨ほしとむねの刺客せつかく
に害がいせられし事ことと清元きよもとお葉はの失うしなせたりし事こととの二つのみ。新聞記者をやめたる後は再び
もとの如く歌舞伎座かぶきざの楽屋がくやに入いらん事を冀こいねがひしかど敬とこやして遠とほけらるるが如くなりしかばこ
こに意を決し志を改めて仏蘭西フランス語稽古けいこにと暁ぎようせい星ほし学校の夜学よがくに通とほひ始めぬ。巴山湖山はまこ兩
子の美育社びいくしゃを興おこせしはあたかもこの年の秋なれば話の順序じゆんじゆここにて初めに立戻たふりかへるものと知
るべし。

『あめりか物語』は明治四十年にユウヨウク 紐育ニウヨウクより仏蘭西フランスに渡りし年の冬里昂リオン市まちヴアンドオム町まち
のいぶせき下宿屋げしゆくやにて草稿さうごをとりまとめ序文じぶん並に挿絵さうえにすべき絵葉書えいやくをも取揃とぞろへ市立美術
館かんの此方こなたなる郵便局ゆうびんきょくより書留小包しよるうこほうにして小波こなみ先生せんせいのもとに送り出版しゅつぱんのことを依頼いらいしたる
なり。この稿料こうりょういかほどなりしか記憶きおくせず。翌年よくねん秋帰国あききこくせし時『あめりか物語』は既に

市に出でゐたりき。われは直に仏蘭西滞在中及び帰航の船中にもせし草稿を訂正し『ふらんす物語』と名づけ前著出版の關係よりして請はるるままに再び博文館より出版せしめしが忽ち発売禁止の厄に会ひてこれより出版書肆との談判甚面倒になりけり。わが方にては最初出版契約の際受取りたる原稿料金百貳拾五円を返済すべしと申送りしを博文館にてはそれだけにてはこの損失はつぐなひがたし出版契約書の第何条とやらに原稿につきて不都合のことあり発行者に迷惑を及したる時は著作者はその責任を負ふべき旨明記しあれば既に御承知のはずなりと手強く申出で容易に譲らざる模様なればわれはこの喧嘩相手甚よろしからずと思ひそのまま打捨て如何様に申来るも一切返事せざりき。わが家の玄關には毎日のやうに無性髯そらぬ洋服の男来りて高声に面会を求めさうさう留守をつかふならばやむをえぬ故法律問題にするなどと持前のおどし文句をならべて帰るなぞ言語道断の振舞度々なりき。博文館編輯局にはその折木曜会の知友多かりき。小波先生は即編輯総長の椅子にあり。『太陽』には浅田空花子『中学世界』には西村渚山人『文芸俱樂部』には思案外史石橋氏各その主筆なりき。これらの人々と会合せし折博文館の文士に対する甚礼なき事を語りしに、出版課に雇はれるものは皆かくの如し物のわかるものは一人もなければ打ちすて置きて心に留めたまはぬがよしといふ。かくて『ふらんす

物語』損害賠償の談判は八年に渡りて落着せず大正五年^{もみやま} 山書店『荷風傑作鈔』なるものを出版し該^{がいしよ}書の一部を採録するに至り重ねて懸^{かけあい}合面倒とはなりけり。かの薄気味わるき博文館使用人は再び類^{ひんびん}々々としてわが玄関に來りて文句をならぶ。不愉快いふばかりもなし。さすがの余も遂に讓歩してここに旧著に類似したる『新ふらんす物語』なるものの編纂と出版発売を黙許しその代りとして旧著の版權を著者の方へ取り戻すこととなしぬ。されば過般博文館より発売せし『新ふらんす物語』なるものの芸術並に文学上の責任に至つては毫^{ごう}も原著者の与^{あずか}り知る所にあらず。かの一書は実に原著者の意志に反して出版せられたるものなりかし。この事ありてより余は書肆^{しよし}を恐れ憎むこと蛇蝎^{だかつ}の如くなりぬ。今の世士農工商の階級既に存せずといへども利のために人の道を顧みざる商^{しょうこ}賈^{やか}の輩は全く人の最下に位せしめて然るべきなり。

毎朝勝手口に御用ききに來る出入商人始めはいかにも正直らしく見せ掛け次第々々に品物を落して不正の利を貪^{むさぼ}るを常とす、米屋酒屋薪屋皆然らざるはなし。書肆の月刊雑誌を發行するや最初は何事も唯々^{いいたくたく}諾々主筆のいふ処に従ふといへども号を追ふに従つてあたかも女房の小うるさく物をねだるが如く機を見折を窺ひ倦^うまず撓^{たゆ}まず内容を俗にして利を得ん事のみ図る。理想は文士の生命にして利は商人の生命よりも首よりも更に大事とす

る所なり。両者到底水火相容るるものにあらざるはけだしやむをえざるなり。

わが著書のその筋より発売を禁止せられしもの『ふらんす物語』について『歓楽』と題せし短篇集あり。後にまた『夏姿』といふものあり。『歓楽』の一篇は初め『新小説』に掲載せし折には何事もなかりし故その頃飯田町六丁目に店を持ちたる易風社の主人に請はるるままその他の小篇と合せて一卷となし出版せしめたるに忽ち発売禁止となりぬ。

易風社はその以前謝礼として壹百円を贈り来りしが発売禁止となるも博文館の如く無法なる談判をなさざる故わが方にても重々気の毒になりいそぎ『荷風集』一卷の原稿をつぐなひとして送りけり。この著幸にして版を重ねき。易風社店を閉ぢし時靱山書店『歓楽』の紙型を買取り店員某の名儀を以て再びこれを出版す。然る処この度は何の御咎めもなく今に至つてなほ販売せりといふ。

『夏すがた』の一作は『三田文学』大正四年正月号に掲載せんとて書きたるものなりしが稿成るの後自ら読み返し見るにところどころいかがにやと首をひねるべき箇所あるによりそのまま発表する事を中止したりしを靱山書店これを聞知り是非にも小本に仕立てて出版したしと再三店員を差遣されたればわれもその当時は甚昵懇の間柄むげにもその請を退けかね草稿を渡しけり。然れどもその折出版届にわが名は出すまじ万一の事ありても当方

にては一切責任を負はざればその辺よくよく御承知あれと念に念を押しやりけり。果せるかなこの小冊子発売禁止となりしのみか、靱山書店はその筋へ始末書を取られ厳しきお叱を蒙りけり。靱山書店今に折々人に語りて永井さんのおかげでは度々ひどい目に逢ひます。かくては罪まつたく作者にあるが如し。

寛政のむかし 山東庵 京伝 洒落本をかきて 手鎖はめられしは、板二元 蔦屋重三郎 お触にかまはず利を得んとて京伝にすすめて筆を執らしめしがためなりといひ伝ふ。とかくに作者あまり板元と懇意になるは間違のもとなり。

『伊波伝毛乃記』といふものあり。これ曲亭馬琴暗に人を誹りて己れを高うせんがために書きたるものなりとか。おのれがこの『嘉加伝毛乃記』いささか名は似たれどもゆめゆめさる不都合の下心あるにあらず。書かでもよきこと書くは唯いつもの筆くせとしかいふ。

二

このごろ雑誌『新潮』の記者見るにも足らぬわが著作を採りこれを基として余が文学年

表なるものを編輯し該誌上に掲載すべければとて過ぎし日のことどもさまさま問合せ来

りぬ。これによりて日頃は全く忘れ果てたりし事どもここに再び思浮ぶる節々多くなりぬ。

そもわが文士としての生涯は明治三十一年わが二十歳の秋、『簾の月』と題せし未定の

草稿一篇を携へ、牛込矢来町なる広津柳浪先生の門を叩きし日より始まりしもの

といふべし。われその頃外国語学校支那語科の第二年生たりしが一ツ橋なる校舎に赴く日

としては罕にして毎日飽かず諸処方々の芝居寄席を見歩きたまきか家にあれば小説俳句漢詩

狂歌の戯に耽り両親の嘆きも物の数とはせざりけり。かくて作る所の小説四、五篇にも及

ぶほどに専門の小説家につきて教を乞ひたき念漸く押へがたくなりければ遂に何人の紹

介をも俟たず一日突然広津先生の寓居を尋ねその門生たらん事を請ひぬ。先生が矢来

町にありし事を知りしは予め電話にて春陽堂に聞合せたるによつてなり。

余はその頃最も熱心なる柳浪先生の崇拜者なりき。『今戸心中』、『黒蜥蜴』、

『河内屋』、『亀さん』等の諸作は余の愛読して措く能はざりしものにして余は当時紅葉眉山露伴諸家の雅俗文よりも遙に柳浪先生が對話体の小説を好みしなり。

先生が寓居は矢来町の何番地なりしや今記憶せざれど神楽坂を上りて寺町通をま

つすぐに行く事数町にして左へ曲りたる細き横町の右側、格子戸造の平家にて

たしか門構もんがまえはなかりしと覚えたり。されど庭ひろびろとして樹木すくな尠ちようずばらからず手水鉢てすいばちの鉢前ばちまへには梅の古木の形面白く蟠わだかまりたるさへありき。格子戸くわしあけて上れば三畳さんじやうつづいて六畳むくじやう（ここに後日門人はせがわとうがい長谷川濤涯はせがわとうがい机を置きぬ。）それより四枚まいだて立ふすまの襖ふすまを境にして八畳はちじやうか十畳じゅうじやうらしき奥の一間いっかんこそ客間を兼ねたる先生の書齋しよさいなりけれ。床とこの間には遊女の立たちすがた姿かかきし墨絵いっつぶくの一幅いっぶくいつ見ても掛けかへられし事なく、その前に据たかゑたる机いっかんばりは一閑張いっかんばりの極めて粗末そまつなるものにて、先生はこの机にも床の間にも書籍といふものは一冊も置き給はず唯六畳むくじやうの間まとの境の襖ふすまに添そひて古びたる書棚しよばなを置き麻糸あしにてしぼりたる古雑誌やうのものを乱雑らんざつに積たみのせたるのみ。これによりて見るも先生の平へい生物せいぶつに頓とん着じゃくせず襟きん懷かい常に洒々しやしやくらくらく落おち々々たりしを知るに足るべし。

初めて余のおそろおそろ格子戸くわし明あけて案内を乞こひし時やや暫しばくにして出きたで来きたられしは鼻はな下に髭ひげを蓄たくわへし四十年配よんじゅうねんばいの眼まなこ大きく色浅黒いろあさくろき人なりき。その様子その年配正しくこの家やの主人あるじらしく見ゆるにぞ、この人こそわが崇拜する『今戸心中』の作者なるべけれど思おもへば、俄にわかにをののく胸押静むねおしめ、漸おだくに名刺差出なせしし突然ながら先生にお目にかかりたき由い言い出いでしに髭ある先生らしき人は訳もなく主人あるじは唯今不在なれば帰宅次第おともむきその趣申伝おもむきふべしといはるるに我は是非なくさらば明朝また御邪魔にお伺ごんがみひ致すべしとそのまま格子戸を立去りし

が、どうも今の人が柳浪先生らしき気がしてならぬ故そつと建仁寺垣の破れ目より庭越しに内の様子を窺へば、残暑なほ去りやらぬ九月の夕暮とて障子皆明け放ちし座敷の縁先、かの髭ある人は煙草盆引寄せ悠々として煙草のみつつ夕風さそふ庭打眺めつ。さてはわが想像にたがはざりけり。何人の紹介状をも持参せず突然たづね行きける故主人自ら立出でしまま不在といひて謝絶せしなるべし。かくてはわが熱心の先生に通ぜん日まで幾度となく尋ね行くより外に道なしと翌日の夕暮再び案内を乞ひしにこの度は女中らしき媼取次に出でて直に此方へと奥の間に通されぬ。見れば床の間の前なる一閑張の机に物書きある人あり筆を擱きて此方に向直らるるに、昨日取次に立出でられし人に瓜二つともいふべきほどよく似たれども、近く対座して重ねてよくよく見れば年も少しく若く身体つきもまたすこし瘦せたる別人なり。後日に至りて先生の話に聞けば取次に出でし人は先生の令兄にて日頃地方を旅行せらるる肖像画家なりとの事なりき。

さてその夕われは是非にも門人となりたき由懇願せしに先生なかなか承知したまはず、小説家なぞにならんと思立つは大なる心得違なり、君今学業を放擲してかかる邪道に踏み迷はば他日必ず後悔臍をかむ事あらん文筆を好まば唯正業の余暇これをなして可なりかつはまたわれは尾崎や川上とは異なりてかの人々の如く多く門生を養ひ教ふるの煩に堪へ

ざるものなり、今までも度々人に頼み込まれし事あれど皆ことわりぬ。されば到底貴下の満足する如く丁寧に教ふる事は叶かなひがたかるべし。もしそれにてもよければやむをえざる故唯折々暇いとまあらん時遊びに來きたられよ。我もまたいそがしからずば君が草稿の字句かなづかい假名遣の誤ぐらゐは正すことを得べしといはれけり。わがよろこび誠に筆紙のつくすべき処ならず幾重いくえにもよろしくとてその日は携へ來りし草稿『簾すだれの月』一篇を差置きもぢもぢして歸りけり。

柳浪先生の繡眼めじろ児を飼ひて楽しみとせられしはあたかも余の始めて先生を見たりしその頃より始まりしなり。最初『簾の月』一篇を置いて歸りし折には胸のみとどろきし故にや小鳥の籠うむの有無うむには更に心もつかざりしが、その後重ねて教を乞ひにと行く度々鳥籠は一ツ二ツと増ふえ來りてその年の冬には六畳の間の片隅一間の壁に添ひて繡眼児の籠はさながら鳥屋の店の如く積重ねらるる事二、三段にも及びやがて鶯の籠さへかの墨絵の遊女が一幅かけたる薄暗き床の間に二ツまで据ゑ置かれぬ。先生がその内ない相しょうを失はれたるはこの前年なりしといふ。されば守るにその人なき家の内何となく物淋しく先生独り令息俊郎としお和郎かずおの両君と静に小鳥を飼ひて娛たのしみとせられしさまいかにも文学者らしく見えて一際ひとときわれをして景仰けいこうの念を深からしめしなり。それより後明治三十六年に及びてわれ亜米利加

に渡らんとするの時暇いとまご乞ひに赴きし折には先生は麻布龍土町あざぶりゆうどちように居を移され既に二度目の夫人を迎へられたりき。

先生が矢来町の閑居には小鳥と共に門人もまた加はり来りぬ。最初に長谷川濤涯君次に中村春雨君また女流の作家にてその名失念したれど妙齡の人代る代るかの六畳の間に机を据ゑたり。余は一番町いちばんちようなる父の家より一週に一、二度は欠かさず草稿を携へて通ふ中やや読むに足るべきもの二、三篇先生の添刪てんせんを経たる後博文館または春陽堂の編輯局に送られき。これと共にわれはまた川上眉山、小栗風葉、徳田秋声等の諸先輩折々矢来の閑居きんごに来るを見ておのづから辱友じよくゆうとなることを得るに至れり。かくて明治三十二年七月わが小説『薄衣うすいころも』と題せし一篇柳浪先生合作の名義にて初めて『文芸倶楽部』の誌上に掲げられたり。当時文壇に勢力ある雑誌はいづれも新作家が作を掲ぐる事を好まざりしよりかくは先生の許を得てその名を借用せしなり。この年朝日新聞記者栗島狭衣君牛込下宮比町うしごめしもみやびちようの寓居に俳人谷活東子と携提けいていして文学雑誌『伽羅文庫きやらぶんこ』なるものを発行せんとするや矢来に來りて先生の新作を請へり。時に先生筆硯ひつげん甚多忙なりしがたぬ余に題材を口授こうじゆし俄に短篇一章を作らしむ。この作『夕蟬ゆうせみ』と題せられ再合作の署名にて同誌第一号に掲げられぬ。『伽羅文庫』は二号を出すに及ばずして廃刊しき。

その頃わが一番町の書齋に大山吾童とよぶ人しばしば遊びに來りぬ。当時尺八の名人荒木竹翁の門人にて吾童といふはその芸名なり。余もまた久しく浅草代地なる竹翁の家また神田美土代町なる福城可童のもとに通ひたる事あり度々『鹿の遠音』『月の曲』など吹合せしよりいつとなく懇意になりしなり。この人生れてより下二番町に住み巖谷小波先生の門人とは近隣の誼にて自然と相識れるが中にも取りわけ羅臥雲とて清人にて日本の文章俳句をよくするものと親しかりければ互に往來する中われもまた羅君と語を交るやうになりぬ。羅氏俳号を蘇山人と稱す。大清公使館通訳官浙江の人羅庚齡の長子なり。この人或日の夕二元園町なる小波先生の邸宅に文学研究会あり木曜日の夜湖山葵山南岳新兵衛なんぞ呼ぶ門人多く相集まれば君も行き見て見ずやとてわれを伴ひ行きぬ。これ余の始めて木曜会に赴きしいはれなり。木曜会の事はここにいはずとも既にその主人が手記せるもの『駒のいななき』といふ書の中に掲げられたれば就きて看るこそよけれ。

乙羽庵主人大橋氏逝きて後『文芸倶楽部』の主筆に三宅青軒といふ小説家ありけり。日頃人に向ひて『文芸倶楽部』はわれを戴きて主筆とせしより忽発行部数三、四万を越るに至れりと誇顔に語るを常としき。また人の文学を談ずる事あれば当今小説家と称するもの枚挙に遑あらざれど真に文章をよくするものに至つてはもし向島の露伴子を措きなば恐らくは我右に出るものあらざるべしと傍若無人しきりに豪語を放ちて自ら高うせしかば新進氣鋭の作家一人として青軒を憎まぬものはなかりけり。されど『文芸倶楽部』によりてその作を発表せんには是非にも主筆の知遇を待たざるべからずとて怒を忍び辞を低うして虎の門外なるその家を訪ふものも尠なからず。一日おのれも菓子折に生田葵山君の紹介状を添へ井上唾々子と打連れ立ちて行きぬ。日頃噂に聞く大家の事なれば最初はまづ門前払なるべしと内々覚悟せしにわけもなく二階の書齋に通され君らは巖谷の門生なりとか。これまでに何か書きたる事ありやと話は容易く先方より切出されぬ。唾々子はその頃類に齋藤緑雨が文をよろこび雅号を破垣花守と称ししばしば緑雨が『おぼえ帳』に似たるものを作りゐたり。この夜も一文を懷中にせしままおそるおそる取出して閲覧を請ひけるに青軒子仔細らしく打見て墨を濃く摺り書体を叮嚀に書かるるは若き人に似ず感心なりとそれよりそろそろ世の新進作家なるものの生意気なる事をさまざま口ぎ

たなく痛罵したる後君たち文章を書かんと思はば何はさて置き漢文をよく読み給ふべしそれも韓柳の文のみにて足れりといふにあらず艶史小説の類殊に必要なり。されば支那小説の事に関してはおれもまた露伴子と共に決して人後に落つるものならずと言ふ。唾々子はかつて文学博士島田篁村翁の家塾にあり漢学の素養浅からざるの人。おのれもまたいはゆる門前の小僧習はざれども父より聞かじりたる事なきにあらざりしかば問はるるがままに聊か答ふる処ありしにぞ大に青軒翁の信用を博しその夜携へ行きける我が原稿は唾々子のものと共に即座に『文芸倶楽部』誌上に掲載の快諾を得たりき。

この青軒先生こそはやがてわれをば桜痴居士福地先生に紹介の労を取られし人にてありけれ。されどこの度の訪問は初めて硯友社の諸先輩を歴訪せし時とは異りて容易に望を遂ぐる事能はざりけり。福地先生の邸はその時合引橋手前木挽町の河岸通にて五世音羽屋宅の並びにてありき。一番町のわが家よりかしこまでは電車なければかなりの遠路なりしを歩み歩みて朝八時頃われは先生が外出したまはざる前をと思ひて三、四度、また夕刻帰邸の時分をはかりて五、六回、先づ青軒翁が紹介状を呈出し面談の榮を得ん事を請願せしが、或時は不在或時は多忙或時は不例或時は来客中とばかりにて遂に望の叶ふべき模様もなかりけり。さすがの我も聊か疲労しかつはまたこの上強ひんには礼を失するに

至らん事を虞おそれせめてわが芝居道熱心の微びちゆう衷ちゆうをだに開陳し置かばまた何かの折宿望を達するよすがにもなるべしと長々しき論文一篇を草しそつと玄関の敷台に差置きて立ち去りぬ。やがて半月あまりを経たりしに突然福地家の執事榎えの本破もとはり笠子より予かねて先生への御用談一応小生より承うけたまわり置べしとの事につき御来車ありたしとの書面に接し即刻番地を目当に同じく木挽町の河岸通なる破笠子が寓居に赴きぬ。これ明治三十三年わが二十二歳の夏なりき。

さて破笠子はおのれが歌舞伎座作者部屋に入り芝居道実地の修業したき心底篤とくと聞取りし後しも俱ともに出でて福地家に至り勝手口より上りてやや暫くわれをば一ひと間まに控へさせけるがやがてこなたへとて先生の書齋と覚しき座敷へ導きぬ。川風涼しき夏の夕暮は燈火正とうかに点ぜられし時なり。福地先生は風呂より上りし所と見えて平袖ひらそで中形ちゆうがた牡丹ぼたんの浴衣ゆかたに縮緬ちりめんの兵児帯へこおびを前まへにて結び大なる革蒲団だいたの上に座し徐おもむろに銀のべの煙管キセルにて煙草のみてをられけり。破笠子は恭うやうやしく手をつき敷居際しきいざわよりやや進みたる処に座を占めければ伴はれしわれはまた一段下りて僅に膝を敷居の上に置き得しのみ。破笠子の口添を待ちわれは今夕こんせき図はからず拝顔の望を達し面めん目もくこの上なき旨申述ぶる中にも万一先生よりわが学歴その他の事につきて親しく問はるることあらば何と答へんかなぞ宛さなら警察署へ鑑札受けに行きし芸者の如

く独り胸のみ痛めけるが、先生は更にわが方かたには見向きもしたまはず破笠子を相手にこんち今いま朝よう巴里パリの川かわ上かみ壮士役者音二郎が事なりより新聞を郵送し来れりきたとて巴里劇界の消息を語かたり出されぬ。かくて三十分ばかりにて我は再び破笠子に伴はれ福地家を辞して帰りしがそれより三、四日にして歌舞伎座盆興行の稽古となるやわれはここに榎本氏請人うけいんにて

歌舞伎座へ証文を入れいよいよ梨園りえんの人とぞなりける。証書の文言左の如し。

一 私儀わたくしぎ 狂言作者志望につき福地先生門生もんせいと相成あいなりきぎ貴座楽屋へ出入でいりさし被差許しゆるされそ

候上者うろううえは 劇道の秘事楽屋一切の密事決けつして而口外致間敷候依而後日のため一札いっさつくだん

如件のいとし

歌舞伎座稽古は後々のちのちまで三階運動場を使用するが例なり。稽古にかかる前破笠子より葉書にて作者部屋はなはだのものを呼集め手分てわけなして書拔かきぬきをかく。当日われは破笠子より作者の面々に引合されつづいて翌日本ほんよみ読よみにと先生出勤の折には親しく皆のものへよろしく頼むとの一言いちごんこれまことに御前ごぜんの御声掛りにして作者の面々おのずか自らわれをば格別の客分たらしめんとするにぞわれは破笠子に計りて客分の待遇は小生の願ふ所にあらず且那芸はかへつて甚はなはだしき耻辱なれば何卒なにとぞ楽屋古来の慣例に従ひ寸毫の遠慮なく使役せられん事を請こうて止まざりしかば破笠子さればとて重ねて先生へ申上げわれをば竹柴たけしばしちぞう七造しちぞうといふ作者の

預弟子あずけでしとなしこの人より楽屋万端の心得拍子木ひょうしぎの入れ方など見習ふ事となしぬ。時に
 歌舞伎座作者部屋には榎本氏を除きて四人の作者あり。竹柴七造たけしばせいきち、竹柴清吉たけしばせいきちは黙阿弥もくあみ翁
 の直弟子じきでしにて一は成田屋付づき一は音羽屋付の狂言方きやうげんかたとて重おもに団菊だんきく、両優の狂言幕まく、明幕あきま
くぎれ切の木を受持つなり。他に竹柴賢二たけしばけんじ、浜真砂助はままさすけといふ作者ありき。賢二といへるは寺じない
かわたけしんしち内河竹新七の弟子なればなほ血氣盛けつきざかりの年頃なりしが真砂助は先代瀬川如阜せがわじよこうの弟子
 とやらよほどの高齡なるに寒中も帽子を冠かぶらず尻端折しりはしよりにて向脛むこうずねを出し半合羽はんがっぽ、日和ひよ
りげた下駄りげたにて浅草山あさくさやまの宿しゆくへん、辺すまいの住居より木挽町楽屋へ通ひ衣裳かつらだいしやう、大おほの道具帳たてを書き
 また番附表看板等ばんぶつえんとうの下絵を綺麗きれいに書く。この老人おきな、猿若町三座表飾さるわかまちさんざおもてかざりの事なぞ委くわしく知
 りゐたり。

さてわが始めて劇部の人となり親しく稽古を見たりし盆興行は団菊両優は休みにて秀しゆう
ちやう調てう染五郎せんごろう、家橋栄三郎かきつえいざぶろう、松助まつすけら一座にて一番目は染五郎の『景清』かげきよ、中幕なかまくは福地先
 生せい新作長唄所作事しよざごと『女弁慶』おんなべんけい（秀調の出物だしもの）二番目家橋栄三郎松助の「玄治店大
おぎり喜利」家橋栄三郎の『女鳴神』おんななるかみ、常磐津林ときわづりんちゆう、中出語りでがたなりき。作者見習としてのわが
 役目は木の稽古にと幕ごとに二丁にちやうを入れマハリとシヤギリの留とめを打つ事幕明幕切の時間
 を日記に書入れ、楽屋中へ不時の通達なすべき事件ある折には役者の部屋々々、大道具小道

具方衣裳とこやまはやし床山かたどう囉子方等 楽屋中漏れなく触れ歩く事等なり。着ちやくと到の太鼓打込みてよ
 一日の興行済むまでは嚴冬も羽織を着ず部屋にてもまきタバコ巻まき 蓆ざうりを遠慮し作者部屋へざもと座元も
 しくは来客の方々見ゆれば叮嚀に茶を汲みて出しその草履を揃へまたたてさくしや立作者出しゅつと頭の
 折はその羽織をたたみ食事の給仕をなし始終つき添ひ働くなり。わがしばしば草履をそろ
 へ茶を汲みて出せし楽屋のお客様にはおおつきじよでん大槻如電ながいそがく永素岳などありけり。

九月となりてわれはここに初めて団菊両優の素顔すがおとその稽古とを見得たり。狂言はたし
 か『水戸黄門記』通しにて中幕「大徳寺」焼香場なりしと記憶す。団十郎はその年春
みとこうもんき

興行の折病に罹り一時は危篤の噂さへありしほどなればこの度菊五郎との顔合大芝居かおあわせおおしばい

といふにぞ景気は蓋ふたを明けぬ中より素破らしきものなりけり。つづいて十一月には一番目

『太功記』馬ばだつ盥ういより本能寺討入までだんしゅう団洲だんしゅうの光みつひで秀菊五郎春永はるながなり中幕団洲の

法眼ほうげんにて「菊きく 畑はたけ」。菊五郎の虎蔵とらぞう福助ふくすけの息女を相手にしての仕草しぐさ六十余よの老人

とは思へぬほど若々しく水もたれさうな塩あんばい梅うめさすがに古今の名優と楽屋中にも人々驚

嘆せざるはなかりけり。二番目は菊五郎の「紙治かみじ」これは丸まる本の「紙治」を舞台に演ず

るやう河竹かわたけしんしち新七しんしちのその時新あたらたかきあろに書卸せしものにて一幕目小春髪こはるかみすきの場ばにて伊十郎いじゅうろう

一いっつちゆうぶし中節ちゆうぶしの小春をそのまま長唄ながうたにしての独吟あり廻つて河庄茶屋場かわしょうちややばとなる二幕目ふたまくめ

は竹本連中出語にてわれら聞馴れし炬燵の場引返して天満橋太兵衛殺の場となる。
 当時の劇界いまだ鴈治郎を知らず「紙治」はいと珍しきものなりしが如し。菊五郎と鴈
 治郎とはもとより雲泥の相違あるものなれば並べていひ出るは誤りなれども近頃鴈治郎
 を見馴れし目より当年の菊五郎を思へば幕明きし時定木を枕に後向きに横はりし音羽
 屋の姿は実に何ともいへたものにはあらず小春が手を取りよろよろと駆け出で花道いつ
 ももの処にて本釣を打ち込み後手に角帯引締め向を見込むあたり全く二度とは見られ
 ぬものなりけり。この狂言書卸の事とて稽古に念を入れし事到底今人の思ひも及ば
 ぬ処なるべし。書拔の読合濟みし日音羽屋は茶屋三州屋二階に竹本相生太夫を
 招き置きて「紙治」一段を語らせこれを登場俳優一同に傾聴せしめ、なほ浄瑠璃すみし後
 は親しく役々言葉の語りやうをば太夫へ質問するなぞ苦心のほど察するに余あり。初日
 を出せし後にも二、三度合方を替へそれにてもなほ落ちつかぬ模様なりけり。

芸談に耽らば限りなき事なれば筆をとどむ。歌舞伎座今は殆その外観を変じたれど元よ
 り改築したるにあらねば楽屋の部屋々々今なほかつてわが見たりし当時に異ならず。十年
 の後われ遠国より帰来してたまたま知人をここに訪ふや当時の部屋々々空しく存して当
 時の人なく当時の妙技当時の芸風また地を払つてなし正に国亡びて山河永にあるの嘆あら

しめき。長々しく昔をのみ語るの愚を笑ふ勿れ。当時楽屋口を入りて左すれば福助松助の室あり右すれば直に作者頭取部屋にして八百蔵の室これに隣りす。それより小道具衣裳方あり廊下の端より離れて団洲の室に至る。小庭をひかへて宛然離家の体をなせり。表梯子を上れば猿蔵染五郎二人の室あり家橘栄三郎これに隣してまた鏡台を並ぶ。それより床山を間にして間口甚ひろきものは即菊五郎の室にして隣りは片岡市蔵それよりやがて裏梯子の降口に秀調控へたりき。三階は相中大部屋なればいふに及ばざるべし。団八梅助頭取をつとめき。

四

秋 暑の一日物かくことも苦しければ身のまはりの手箱用筆筒の抽斗など取片付るに、ふと上田先生が書簡四、五通をさぐり得たり。先生逝きて既に三年今年の忌日もまた過ぎたり。駒光何ぞ駛するが如きや。

おのれ始めて上田先生が辱知となるを得たりしは千九百八年三月先生の巴里に滞留せられし時なり。これより先わが身なほ里昂の正金銀行に勤務中一日公用にてソオン河

上の客棧きやくさんに嘲風ちやうふう姉崎あねざき博士を訪ひし事ありしがその折上田先生の伊太利亜より巴里きたに來られしことを聞知りぬ。わが胸はいまだその人を見ざるに先立ちて怪しくも轟きたり。何が故ぞや。そもそもその年月としつきわが身をして深く西歐の風景文物にあこがれしめしは、かの『即興詩人』『月草つきくさ』『かげ草かげくさ』の如き森先生が著書とまた『最近海外文芸論』の如き上田先生が著述との感化に外ならざればなり。わが身の始めてポオドレエルが詩集『悪の花』のいかなるものかを知りしは上田先生の『太陽』臨時増刊「十九世紀」といふものに物せられし近世フランス仏蘭西文学史によりてなりき。かくてわれはいかにかして仏蘭西語を学び仏蘭西の地を踏まんとの心を起せしが、幸さいわいにして今やその望み半なかば既に達せられし折柄、あたかも好よし先生の巴里に來れるを耳にす。わが欣よろこび譬たとへんに物なし。やがてわれは里昂の銀行を辭職し巴里に入りて拉甸区ラテンクの一客きやく舎しゃに投宿したり。然れども巴里にはもとより知る人ひとりもなかりしかば先生の旅館も知るによしなく紹介を求めんにもそのつてなかりき。われは初めて北米に遊びてよりこの年月としつき語るに友なき境涯に馴れ果て今は強しひて人を尋ねもとむる心もおのづからに薄らぎあたりしかば、唯ひとり巴里ちまたの巷の逍遙ちやうにうつらうつらと日を過すのみなりき。

ある夜よ元老院門前の大通なる左側コンセール小紅亭ルージュとよべる寄席よせに行きぬ。この寄席もま

た巴里ならでは見られぬものの一なるべし。木戸銭安く中売なかうりの婆酒珈琲ばば コーヒーなど売るさまモンマルトルの卑しき寄席ことなに異らねど演芸は極めて高尚に極めて新しき管絃樂またはオペラの断片にて毎夜コンセルヴァトアルの若き樂師來つて演奏す。折々定連じょうれんの客に投票を請ひ新しき演題を定めあるひは作曲と演奏との批評を求むるなどこの小紅亭の高尚最新の音楽普及に力をつくす事一方ひとかたならぬを察すべし。おのれドビュツシ一派の新しき作曲大方漏すことなく聴き得たるはこの小紅亭の夕なり。初て上田先生を見たるもまたこの小紅亭の夕ぞかし。

小紅亭の定連は多く拉甸区の書生画工にして時には落魄らくはくせる老詩人かとも思はるる白髪おきなの翁を見る。その夕中ゆうなか入も早や過ぎし頃ふとわれは聴衆の中にわが身と同じく黄いろき顔したる人あるを見しが、その人もまたわれを見て互に隔たりし席より訝いぶかげに顔を見合せたり。然れども何人なんびとなるやを知らざれば言葉もかはさで去りぬ。これ即上田先生すなわちにして、その夕先生ゆうべは英吉利西風の背広に髭もまた英国風に刈り鼻眼鏡をかけてゐたまひけり。

次の日われサンジェルマンの四ツ角なる珈琲店カッフエーパンテオンにて手紙書きてゐたりしに、向側なる卓子テーブルに二人の同胞あり。相見れば一人はわが身かつて外国語学校支那語科に

ありし頃見知りたりしふつこ 仏語科の 滝村立太郎君、また他の一人は 一ひとつばし 橋の中学校にて
 われよりは二年ほど上級なりし 松本 丞治君なり。この旧友二人はその夕クリユニイ博
 物館前なる旅館にありし上田先生のもとにわれを誘いざなひゆきたり。

あくるとし 翌年（明治四十二年）の春もなほ寒かりし頃かと覚えたりわれは既に国に歸りて父の家
 にありき。上田先生 一 日 鉄無地羽二重の 羽織博多の 帶着流しにて突然音づれ来給きたまへり。

この時のわがよろこびは初めて巴里にて相見し時に優るとも劣らざりけり。なべて洋行中
 の交際としいへば多くは諺ことわざにいふなる旅は道づれのたぐひにて帰国すればそのままに打絶
 ゆるを。先生のわが身に対する交情こそさる 通とお一 遍いっぺんのものにてはなかりしなれ。火鉢
 を間にしてわれらは互に日本服着たる姿を怪しむ如く顔見合せ今更の如く昨日きのうとなりにし
 巴里のこと語出でて 愁しゆうぜん 然ぜん たりき。

明治四十三年の初森はじめ上田両先生慶応義塾大学部文学科刷新の事に参与せらるるやわが身
 もその驥尾きびに附いして聊いささか為す所あらんとしぬ。事既に十年に近き昔とはなれり。当時はあ
 からさまに言ひがたき事なきに非あらざりしかど十年 一ひとむかし 昔の今となりては、いかに慎みな
 きわが筆とて最早もはや累わざわいを人に及さざるべし。その頃われは父への手前心はもとより進まね
 ど何処か学校の教師にてもやせんと 思おも 煩いわずら へる折からなり。ふと第三高等学校仏蘭西語

の教師に人を要するやの噂ちらと耳にせしかば早速事を京都なる先生に謀^{はか}りしことありき。これに対する先生の返書今偶然これを篋^{きょうてい}底に見出しぬ。再読するにまのあたり生ける先生の言を聞くが如し。妄^{みだり}にこれを左に録する所以感慨全く禁ずべからざるがためなり。

拜啓久しく御無沙汰に打過ぎ候。段平に御宥免被下度候しかし毎度新聞雑誌に

て面白き御作^{おさく}拝見^{つかまつ}仕りわれら芸術主義の徒のためかつは徳川の懐かしき趣味のため御

奮闘^{めざま}ありがたく奉感^{かんしやたてまつり}謝候、小生事去年の秋よりついつい上京の機を得ず帝都の

眼覚^{いなり}しき活動に遠ざかりて残念至極に候まま明日^{あす}は明日はと思ひつつ今日^{こんにち}までに相^あ

成^{いなり}候が今月末は是非とも東京へ参り御眼にかかりたく存^{ぞんじ}をり候実はただ今直^{すく}にても

御面会致し親しく懇願^{いたしたき}致度^{しゅつたい}事件^{しゅつたい}出来候が何分意に任^まかさず候故手紙にて申上

候

昨年御手紙にて当地高等学校仏蘭西語学教師の件御話これあり候が早速その向^{むき}を探り

申候処今年九月よりの事なれば何分まだ人選^{とう}等の事は校長にも深く考へをらず従つて

御尊父様の御親交ある松井^{まつい}博士の紹介あらば自然御就任の事となるべしと考へ小生も

あまり騒立てぬ方かへつてよろしからむと控^{ひかえ}をり候しかし小生の心の底には別に一種

の考ありて貴兄の御入^{ごじゆらく}洛を小生自身にとりて非常なる幸福と存ずると共にただ今帝

都にて新芸術の華々はなばなしき活動を試みさせ給ふ貴兄をして教育界の沈滞したる空氣中
 に入れしかも京都の如き不徹底古典趣味の田舎へ移す事は貴兄自身にとりてもわが文
 学のためにも不得策ふとくさくにはあらざるかとやや心進まざる向もむきこれあり種々熟考仕候そ
 の内段々時日を経てその後の経行なりゆきを觀察仕候処一、二の候補者も出来たれど、どれ
 もまだ確定せず教授の細目も聞合せ候が仏語の極めて初歩のみを教へる事にて重おもに当
 地あるひは東京の仏蘭西法科へ入学する者のための如く随したがって狭い田舎の事なれば自然
 大学の教師なぞよりも幾分か注文も出るならむと考へ候かたがた取集めて考へればあ
 まり面白き事業とは思へずまたたとへ忍び得る事としても貴兄の如き芸術家をかか
 刺※の少き田舎に置く事はどうしても口惜しい事ならむと確信の度ますます強く相成
 申候それ故御返事を今日まで怠りをり申候この段まことに失礼に候ひしが何かもつと
 華々しき事業をと心掛けついつい今日に相成候然るに一月三十一日に至りて急に東京
 より来信これあり珍らしき事を聞込候うけたまわり
 この事は非常に秘密に致いたしをり候やうに承うけたまわりをり候が実は今度東京の慶応義塾にてその文
 学部を大刷新しこれより漸々ようよう文壇において大活動を為なさむとする計画これありそれ
 につき文学部の中心となる人物を定むる必要を感じ候趣おもむきに候、そこで三田側の諸先輩

一同 交詢社こうじゆんしゃにて大会議を開き森鷗外先生にも内相談ないそうだんありしやうに覚え候が、義塾の専任となりて諸の画策もろもろをする文学家を選び候処夏目漱石氏なつめそうせきか小生をといふ事に相定候由、然るに夏目氏は朝日新聞の關係を絶つ事難かたくして交渉纏まとらずまた森先生より小生に頼むやうにと義塾の人が千駄木せんたぎを訪問したる時、森先生のいはるるには、京都大学の關係上小生の交渉もむづかしからむと申され候由、そこで先方の言ふには小生のことわりたる時誰がそれならば適當ならむとあるに答へて、森先生は貴兄を推薦なされ候、先方の申すには然らば小生に頼む時いつそ事情を打明けて小生の身上みのうえ動きがたき場合には直ちに小生より貴兄へこの事件交渉してもらひたしとの事に御座候、小生は森先生の手紙に対し種々考を述べ置候が要するにただ今京都を去る事は出来兼ね候趣返事おもむきいたし、また貴兄を推薦されし森先生の眼光に服しをる旨申送り候、右やうの次第万事打明け候が貴兄はこの交渉に御応じの御心おこころ如何にや、三田の中心となりて文壇にそれより御雄飛の御奮発は小生の偏ひとえに懇願する所何卒御快諾の吉報に接しなく存をり候もとより御内意を伺ふまでにて事定らば別に正式の交渉はこれあるべく候

委細の事は御面晤ごめんごの節と存候が小生の聞込みたる処にては、唯学校を盛にするだけの

事ではなくもつと大なる運動の序幕かと存をり候例へば帝国劇場の如きは義塾の側より殆ど自在に使ひ得られべきやう見受けられ余は言はずとも種々面白き事ありさうに候、芸術家最高の事業はどうしても劇部にありと信ずる小生はこれを聞いて直にモリエールやグリックやゲエテ、ワグナーアさてはアントワンを思出し何かの形にてこの愉快なる事業に助力したく自分でも大に心を動かし候なほ委しくは森先生と御相談あるもよろしかるべきが、以上の成行筆紙にてニュアンスを尽しがたく候がざつと如斯に候

条件については決して不満足のないやう致べく、その方は殆どカルト・ブランシュの如き様子に候、これまた御承諾さへ相成らば森先生が万事御含みのやうに候とにかく芸術のためこの際御快諾の御報に接するやう祈上候 勿々

二月五日

上田敏

永井荷風様侍史

張目飛耳の徒多き今の文界なれば万事決定まで何分内密に願上候
悦子よりもよろしく申上候田舎にありて曾遊の地を思ひつづけをり候ままかつてと

まりしホテルの紙を用る候

この書信は維納ウイennaの客棧きやくさんホテル・ブリストルの記章を印刷したる書簡箋にペンにてこまごまと認められたり文中悦子とあるは令夫人なり。諄々じゆんじゆんとしてわが身のことを説き諭さとさるるさま宛さながらら慈母の児こを見るが如くならずや。この一書によりてわが三田に入りし当時の消息もまたおのづから分明ぶんめいなるべし。わが返書に対し折返して到着したる先生の書次の如し。その全文を掲ぐ。

二月七日の御手紙拝見仕候先は過日ますの唐突なる願事御聞届被くだされ下候段深く感謝仕候その後森先生とも種々御打合せの御事と察し申候が何卒折角の壮拳ゆゑ三田の方御助力を懇願仕候御謙遜の御手紙なりしが決して貴兄ならば成功せざるはずなしと確信仕候殊じやつきに御自身教鞭を執らるるのみならずその上向後の発展ここうしん上一種のEmanを与へ奮心を惹起じやつきする任務は普通の学究にては出来にくかるべしと思へばこそ貴兄へ懇請仕候ひしかと存候小生は本月末か来月早々上京のつもりに候故その時篤とくと御話申上ぐべく候京都にては全く話対手はなしあいてなく困却仕候唯宅の者と散歩して食事でもするより他に致方なく候ただ本年は元日より今日まで毎日拙作を起草しそれにて紛れまぎをり候この地はとにかく読書にも創作にも不適當なるぶるじよあじいの国にて御話にならぬ無聊ぶりようの郷さと

に候唯この頃はルウイエといふ伊東さんのお嬢さんを娶つた若い海軍士官と往来しこの他に先月より二、三人急に仏蘭西人が加はつてややおもしろく相成候

きのふの御作中柳橋の芸者が新橋といふ敵国を見る処おもしろく拝見仕候また

先日のモリス・バレスが故郷の白楊の並木をおもふ一節感服仕候当地の平田禿木

氏はボオ・ブラムメルの処を見て英国好の人なれば甚だ嬉しがりをり候文芸に型や

主義は要らず縦横に書きまくるが可しと考ふる小生は貴兄の作物が鳥の歌ふ如く自

然に流れでるのを羨ましく思をり候今後種々の方面へ筆を向けて、あとから追付かむ

とする評論家の息をはずませてやり給へと遥かに囑望仕候

有楽座にて二十六日はヴィニエツチ氏の音楽と他に『椿姫』の芝居これあり候由もし

上京して間に合はば幸福と存候がちとむづかしく候

過日同座にて一度御眼にかかりしのみなれど何卒御尊父様並に御母堂へよろしく御

鳳声被下度候 匆々

二月十一日朝

上田敏

永井荷風様侍史

かくの如く先生はわが拙作の世に出るごとにあるいは書を寄せあるいはわが家に來給ひて激励せられき。『三田文学』第一号漸く出でんとするや先生の書簡はますます細事に涉りて懇切をきはめぬ。

拜啓益々御清適の段 奉 賀 候、その後『三田文学』御経営の事如何に相成候や過

日大倉書店番頭原より他の事にて二回ほど書面これあり候序に、はじめは談判不調

(尤も与謝野君との間の略式の話について) 次にはまた再度貴兄及び塾と談合をはじめたる趣を書添へをり候とにかく雑誌御経営の困難御察申候

これにつき森先生の意見は如何に候や小生の考にては原稿料は多少他よりも高く見積りて置く事必要なるは先日申したる如くに候が何もづぬけて高くするにも及ばずはじめよりあまり多く売らむと計りても無益かと存候、要するに二百頁の雑誌とすれば毎月三百円の総入費あらば事足りむか、自営にすればその幾分は確に戻つて来るはず、書肆の方には一年に月数拾円の損として他方に広告機関ともなる利益もあるはずこの条件に近い所にて大倉もうけ合ひさうなものに候がどういふ工合にて謝絶せしやら何はともあれ来月中旬にいづれ雑誌発刊の運と存候ついてはほぼ原稿締切期限等御示教被下度 候小生も何か一文寄稿したく候

一昨日より家内および娘とともに宇治川に遊んで河沿の宿にとまり翌朝奈良へまかりこして新築の奈良ホテルといふに休み、そこより車を雇ひて春日社頭の鹿をはじめ名所遊覧仕候がホテルの赤旗をつけた車にのつた所はまるでめりけんの觀光団に御座候ひき、夢見の里とも申べきNara la Morteにはかりよんの音ならぬ梵鐘の聲あはれに坐る古を思はせ候、その時またおもふやう安倍仲麿がこの小さき邑を出で大陸の支那しかも唐代の支那を見た時、とても歸られなくなりて今歐洲の大都に遊ぶ人の心の如くに日本を呪詛せしものと存候このつき御来遊のせつは御一所に奈良へ出かけたきものに候妻よりよろしく 匆々

三月二十一日

上田敏

永井荷風様侍史

大正五年われ既に病みてつかれたり。まさに退いて世の交りを断たん事を欲し妓家櫛比する浅草代地の横町にかくれ住む。たまたま兩國大相撲春場所の初日に当りてあたり何となく色めき立てる正午近くなり。われ銭湯より手拭さげて歸り来る門口京都より東上せられし先生の尋ね来らるるに会ひぬ。さては先生の寛容深くわが放蕩無頼を

咎めたまはざるかと、思へばいよいよ喜びに堪へず、直に筋向なる深川亭にいざなひしが、何ぞ図らんこの会飲永劫の別宴とならんとは。心ゆくばかり半日を語り尽して酒亭を出でしが表通は相撲の打出し間際にて電車の雑沓甚しかりければ、しばしが間とて再びわが隠家の二階に請じて初夜過ぐる頃までも語りつづけぬ。わが家の近くには豊沢松太郎 竹本播磨太夫の住居妓家の間に交りてありければにや、女の音々《ねじめ》には似も寄らぬ正しき太棹の響折々漏れ聞ゆるにぞ談話は江戸俗曲の事また先頃先生のさる書肆より翻刻を依頼せられしといふ『糸竹初心鈔』がことより、やがてはわがその頃の作品の批判に移りて、かかる種類のものにては笠森お仙が一篇詞最もおだやかに想最もやはらかに形また最もとのひしものなるべしと語られけり。

数日の後先生再び京都に赴かんとせらるるや我いかにしけん今までは一度も先生を停車場に送りたる事なかりしを。後にて思合すれば虫が知らせしなるべし。この夕ばかりは怪しくも中央停車場に出で行く心起りて、食堂の卓子に汽車出づる間際まで令夫人令嬢と共に珈琲をすすりこの次夏の休みの御上京を待たんと言ひしがそは全く仇なる望にありけり。

大正五年七月九日先生の訃いまだ公にせられざるに先立ち馬場孤蝶君悲報を二、三の親

友に伝ふ。余倉皇として車を先生が白金の邸に走らするに一片の香煙既に寂寞として
 靈柩のほとりに漂へるのみ。われこれを見し時咄嗟の感慨あたかも万巻の図書咸陽
 一炬の烟となれるが如き思ひに打たれき。わが当代の文化や先生の訃によつてその失ふ
 ところ殆ど計り知るべからざる事を思ひたればなり。

大正七年稿

青空文庫情報

底本：「荷風随筆集（下）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年11月17日第1刷発行

2007（平成19）年7月13日第23刷発行

底本の親本：「荷風随筆 一〜五」岩波書店

1981（昭和56）年11月〜1982（昭和57）年3月

※ルビは新仮名とする底本の扱いにそつて、ルビの拗音、促音は小書きしました。

入力：門田裕志

校正：米田

2010年9月5日作成

2011年4月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

書かでもの記

永井荷風

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>